

平成 26 年度 優秀卒業研究論文

吃症状が聞き手に与える心理的影響 － SD 法による調査 －

Psychological Influences of Stuttering on Listeners - A Survey Using the SD Method -

言語聴覚学専攻 西山 里奈
(指導教員 高橋 泰子)

要 約： 将来、リハビリテーション専門職に就く学生に、吃音に関する正確な知識を普及して、吃音者への適切な対応方法の理解を促す必要がある。今回、本学学生 3・4 年生の理学療法学専攻学生、作業療法学専攻学生、言語聴覚学専攻学生を対象に、吃音者の話し方を聞いてどのような印象を抱くのかを SD 法を用いて調査を実施した。吃音のサンプル音は、吃音の中核症状の 3 タイプにわけて作成した。その結果、「繰り返し」の症状で男女別、学年別、専攻別に比較したところ感じ方に違いがみられた。男性の方が吃音者の話し方について批判的であり、女性の方が受け入れは肯定的である傾向がみられた。学年別比較では、吃音症状の発話速度はいずれも遅いと感じているが、特に 3 年生の方が遅く感じていた。専攻別比較では、理学療法学専攻学生と言語聴覚学専攻学生に比べ作業療法学専攻学生の方が受け入れは肯定的である傾向がみられた。リハビリテーション従事者を目指す学生であっても、受け入れは決してポジティブではなかったものの、傾聴する姿勢は備わっているように見受けられる。今後、吃音を正しく理解されるよう啓発していくためには、吃音そのものが吃音者の性格を左右しているわけではないため、話の内容に耳を傾け、医療従事者として受容する教育的活動を行っていく必要性が示唆された。

キーワード： 吃症状、心理的影響、SD 法

1. 問題と目的

DSM- IV (1994) ¹⁾ によれば、吃音は 2-7 歳の間に最も多くが発症し、10 歳までに 98% が発症するという。幼児期に発症した直後は症状に関する自覚が見られない。ところが、自我が発達し、発話困難な場面の経験によって吃音の自覚化が生じ、特定の語や場面に対して恐れや不安が現れる。また、それとともに周囲の誤っ

た対応等により、自らの吃音に対して嫌悪感や羞恥心を抱くようになる²⁾。やがて話さなければならぬ状況から、可能ならば逃れようとする行動が始まる。しかし、一時的に話すことを回避し、いやな感情から逃れたとしても、回避したという体験がさらに発話に対する恐れを増長させ、悪循環に陥る場合がある³⁾。また、吃音は見えにくい障害のため、本人や周囲がなかなか受け入れられない場合が多い。吃音者の

周囲が吃音に対して正確な知識を持っていないと、誤った対応が多くなり、吃音者が過ごしにくい環境となる。吃音者を理解し、受け入れる社会にしていくためには、環境を調整することがより重要であると推測される。そのため、非吃音者にも吃音に対する正確な知識を普及して、吃音への適切な対応方法の理解を促す必要がある。そこで、吃音者の話し方を聞いてどのような印象を抱くのかを調査することで、吃音についての正確な知識普及の一助とすることを目的とする。

2. 方法

(1) 対象

本学学生3・4年の理学療法学専攻学生(PT)、作業療法学専攻学生(OT)、言語聴覚学専攻学生(ST)計185名。内訳は男性108名、女性77名。(平均年齢21.38歳 ± 3.00)

(2) 方法

吃音の中核症状である3タイプ(繰り返し、引き伸ばし、ブロック)の話し方を聞いてどのような印象を抱くのかをSD法を用いて調査した。提示刺激は、吃音検査法の文章音読課題⁴⁾から引用し、筆者が吃音中核症状に準じてサンプル音を製作・録音した。時間は1タイプの症状につき約1分間である。

SD法(semantic differential method: 意味差別法)の項目はOsgood, C.E (1975)の評価尺度EPA (evaluation, potency, activity)に配慮して以下のように作成した。

①聞き取りやすい—聞き取りにくい、②待てる—待てない、③スッキリする—イライラする、④笑える—笑えない、⑤明るい—暗い、⑥爽快—不快、⑦力強い—弱々しい、⑧親しみやすい—親しみにくい、⑨自然—不自然、⑩気持ちが良い—モヤモヤする、⑪かわいそう—羨ましい、

⑫内容が分かりやすい—内容が分かりにくい、⑬楽しそう—苦しそう、⑭速い—遅い、⑮長い—短いとし、5段階に分けた。

研究協力者へは口頭で説明すると同時に、質問紙の冒頭に、研究の説明文を記載した。個人を特定する必要性がない研究であるため、氏名を記載する箇所は設けていない。質問紙を回答することで、研究協力の同意が得られたと判断した。

なお、本研究は本学研究倫理委員会の承認を受けて実施した。(承認番号 OKRU26-B310)

3. 結果

3つのタイプの吃症状を聞いて抱いた印象の違いを①男女別②学年別③専攻別に比較した。

① 男女別比較

男女別に3つの吃音中核症状をT検定を用いて比較分析した。

図1-1が示すように、「繰り返し」のタイプでは、「待てる—待てない」($t=-1.98$)、「スッキリする—イライラする」($t=-2.38$)、「笑える—笑えない」($t=2.35$)、「力強い—弱々しい」($t=-2.43$)「気持ちが良い—モヤモヤする」($t=-2.15$)の項目の平均値に有意な差が認められた($p<0.05$)。

次に図1-2が示すように、「引き伸ばし」のタイプでは「笑える—笑えない」の項目の平均値に有意差が認められた($t=2.09$, $p<0.05$)。これも繰り返し同様に男女共「笑えない」との印象であるが、女性の方がその傾向は強い結果が出た。

さらに図1-3が示すように「ブロック」のタイプでは「待てる—待てない」($t=2.15$)、「爽快—不快」($t=-2.09$)、「力強い—弱々しい」($t=-2.24$)、「気持ちが良い—モヤモヤする」($t=-2.07$)の項目の平均値に有意差が認められた($p<0.05$)。

「待てる－待てない」の回答結果から、男性は「待てない」、女性は「待てる」に分かれた。「爽快－不快」の回答結果から、男女共「不快」という印象ではあるが、男性の方がより顕著に現れていた。「力強い－弱々しい」の回答結果から、「弱い」という印象は男性の方が顕著であった。「気持ちが良い－モヤモヤする」の回答結果から、男女ともにモヤモヤする印象があるが、男性の方がその印象はより顕著であった。

3つのタイプを通じて男女比較したところ、吃音の発語は女性の方が待てるが、「ブロック」では男性の耐性は低かった。

「スッキリする－イライラする」の回答結果より、男女共に吃音の発語はイライラする傾向にあるが、男性の方がより顕著であった。「力強い－弱々しい」の結果から、男性は「弱々しい」と感じる傾向があり、女性はそうではなかった。「気持ちが良い－モヤモヤする」の回答結果から、男女共にモヤモヤする傾向はあるが、男性

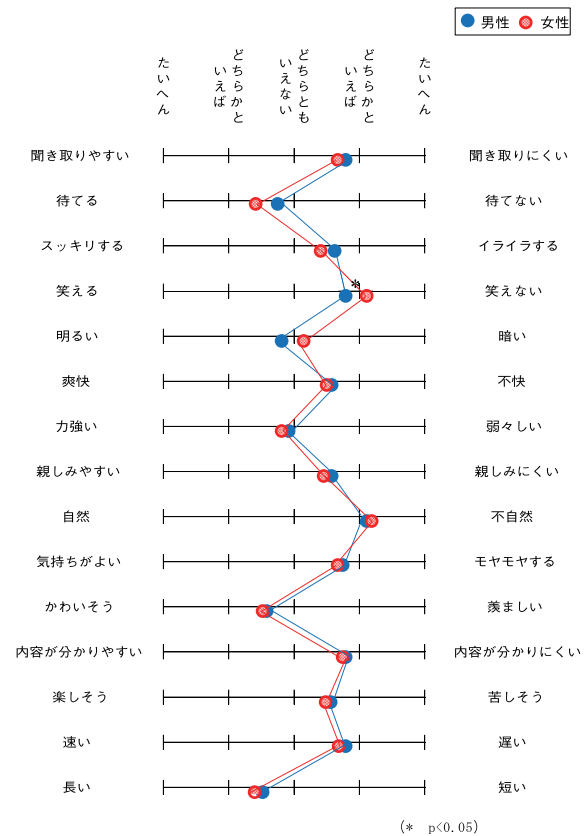


図 1-2 「引き伸ばし」タイプの男女別比較（平均値）

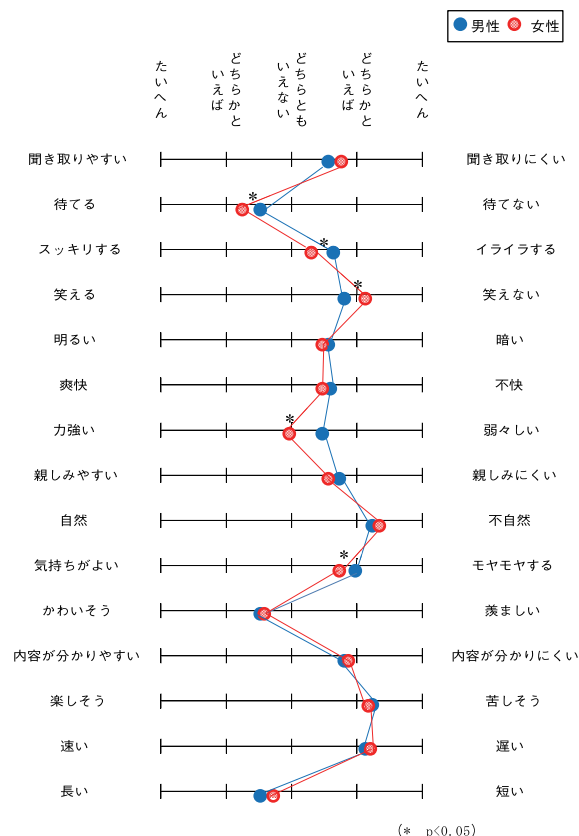


図 1-1 「繰り返し」タイプの男女別比較（平均値）

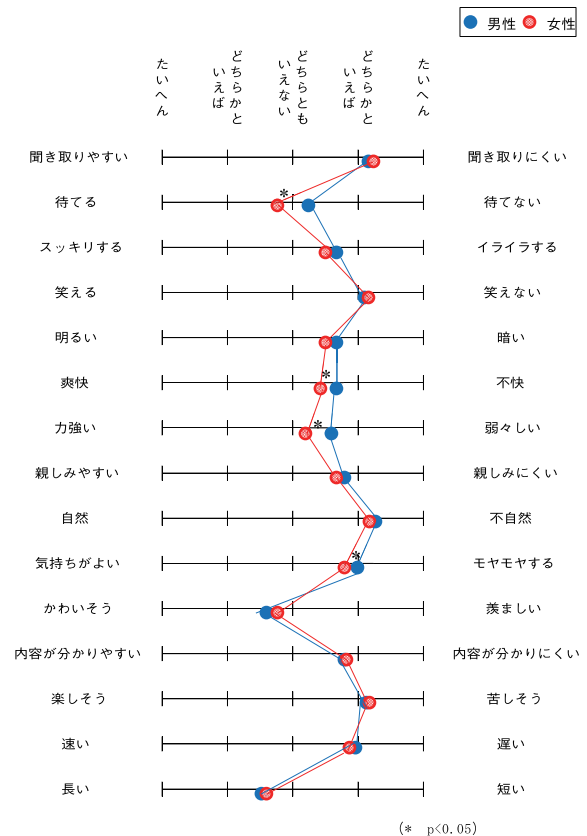


図 1-3 「ブロック」タイプの男女別比較（平均値）

の方がよりモヤモヤする印象は強かった。「笑える－笑えない」の回答結果から、男女共に「笑えない」という印象・感想を持っているが、女性の方がその傾向は強く出ていた。

② 学年別比較

3年生と4年生から得られた回答を学年別に3つの吃音中核症状をT検定を用いて比較分析した。

「繰り返し」のタイプでは、図2-1が示すように、「速い－遅い」($t=2.11$)の平均値に有意差が認められた($p<0.05$)。3年生も4年生も遅いと感じているが、3年生のほうがより遅く感じていることが分かった。

「引き伸ばし」、「ブロック」のタイプでは3年生と4年生との間には有意差が認められなかった。

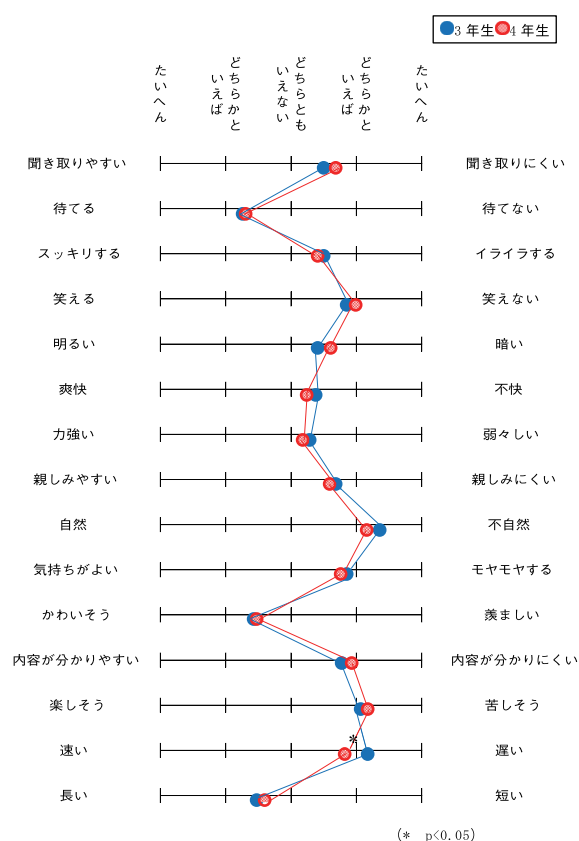


図2-1 「繰り返し」タイプの学年別比較（平均値）

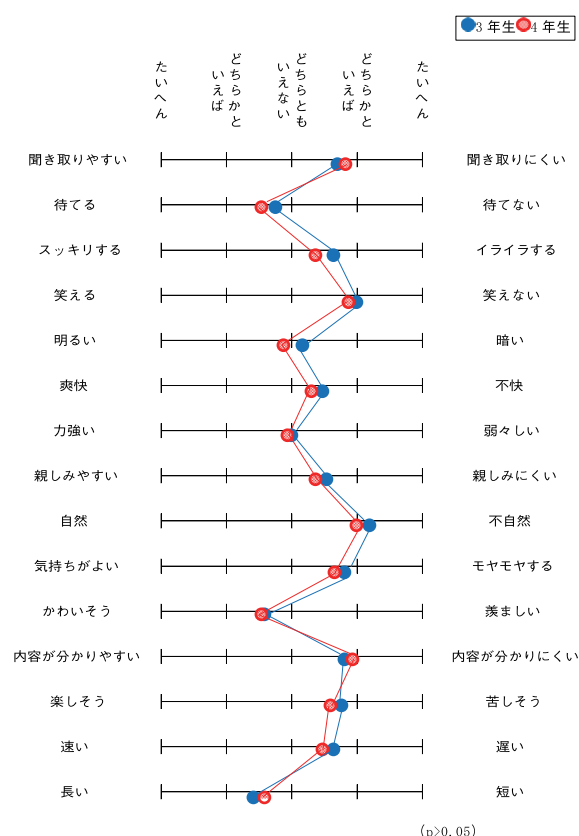


図2-2 「引き伸ばし」タイプの学年別比較（平均値）

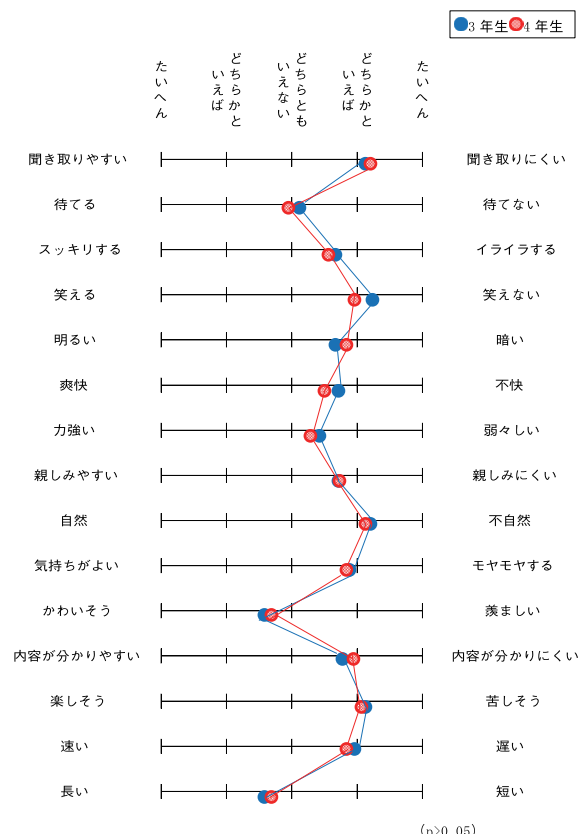


図2-3 「ブロック」タイプの学年別比較（平均値）

③専攻別比較

PT、OT、STの専攻別を、一元配置分散分析およびF検定を用いて比較分析した。

図3-1が示すように、「繰り返し」のタイプでは、「待てる－待てない」($f=3.308$)の項目の平均値はOTとSTとの間に有意な差が認められ、OTの方が「待てる」傾向が強い結果であった($p<0.05$)。「爽快－不快」($f=4.443$)の項目の平均値にPTとST、STとOTで有意差が認められ、PTが最も不快に感じていた($p<0.05$)。「力強い－弱々しい」($f=3.786$)の項目ではPTよりOTのほうが弱々しく感じているという差が認められた($p<0.05$)。「親しみやすい－親しみにくい」($f=2.628$)の項目ではSTの方がOTより親しみにくいと感じているという差が認められた($p<0.05$)。

吃音中核症状の「引き伸ばし」、「ブロック」のタイプではいずれの項目においても有意差は認められなかった($p>0.05$)。

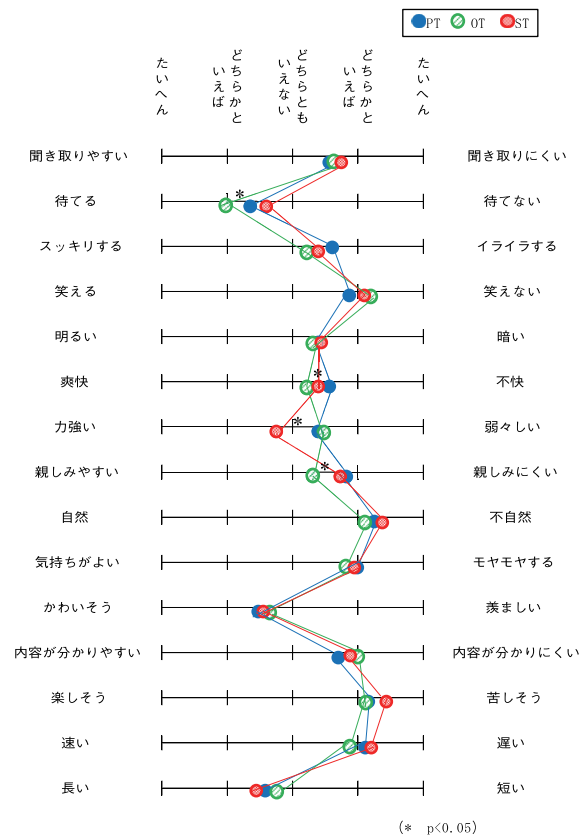


図3-1 「繰り返し」タイプの専攻別比較（平均値）

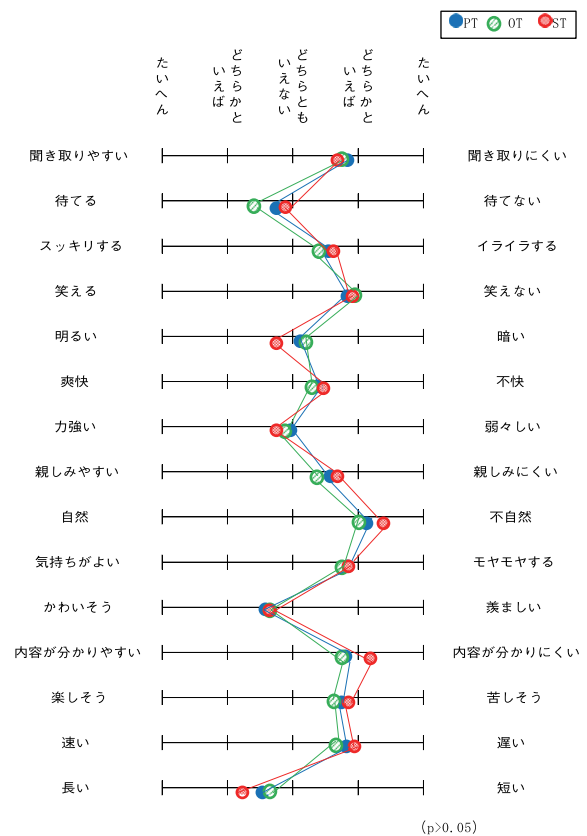


図3-2 「引き伸ばし」タイプの専攻別比較（平均値）

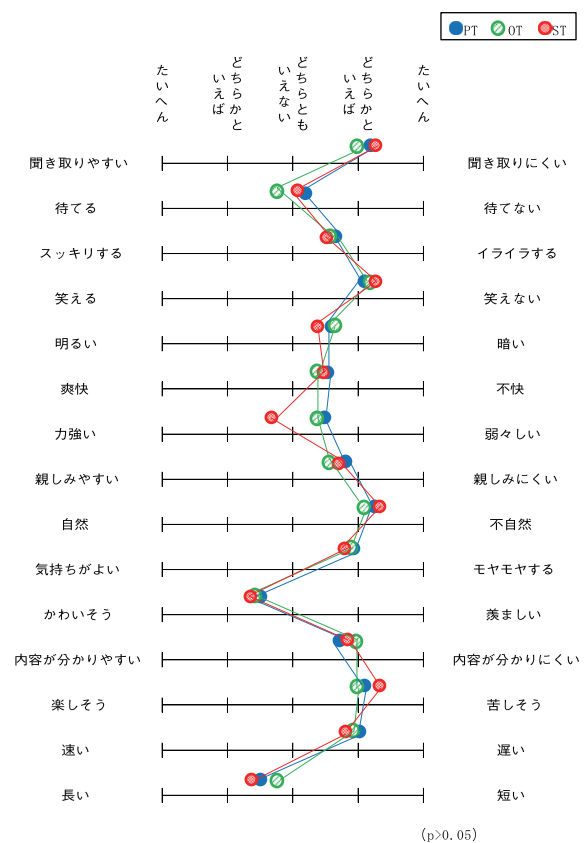


図3-3 「ブロック」タイプの専攻別比較（平均値）

4. 考察

男女で比較したところ、「繰り返し」のタイプに対して、男性の方が話し方に批判的であり、女性の方が受け入れは男性より肯定的である傾向が見られた。

学年比較では、吃症状による発話速度はいずれも遅いと感じているが、特に3年生の方が遅く感じていた。

専攻別では、「繰り返し」のタイプにおいて、PT、ST に比べOTの方が話し方の受け入れが肯定的である傾向が見られた。

本調査結果から、本学学生の属性により受け入れの傾向に差はあるものの、吃症状のある発話に対して「聞き取りにくい」「イライラする」「暗い」「不快」「弱々しい」「親しみにくい」「不自然」「モヤモヤする」「かわいそう」「内容が分かりにくい」「苦しそう」「遅い」「長い」といった印象があり、吃音症状に対する受容は決して良好なものではなかった。しかし、話し終わるのを待ってられるという特性があった。リハビリテーション従事者をを目指す学生であっても、受け入れは決してポジティブではなかったものの、傾聴する姿勢は備わっているように見受けられる。今後より一層吃音者に対する肯定的な受け入れを啓発するためには、吃音そのものが吃音の性格を左右しているわけではないため、話の内容に耳を傾け、医療従事者として受容する教育的活動を行っていく必要性が示唆された。

謝辞

今回、アンケートに協力して下さった本学の先生方及び学生の皆様をはじめ、丁寧にご指導・ご教授して下さいました高橋泰子先生に心より感謝いたします。

[引用文献]

- 1) American Psychiatric Association Diagnostic and Statistical Manual of mental Disorders Fourth edition. 1994.
- 2) 林秀幸 症状の自覚が乏しい1成人吃音者に対する考察 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 21 期生臨床研究報告書, p176-183, 2001
- 3) 都築澄夫 言語聴覚療法シリーズ 13 吃音 建帛社, 東京, 2004
- 4) 小澤恵美 他 吃音検査法 学苑社, 東京, 2013
- 5) 小林宏明 川合紀宗 シリーズきこえとことばの発達と支援 特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援 学苑社, 東京, 2013
- 6) Charles E Osgood, William N may, and mussay S.minon. Cross Cultural Universale of affective meanings. University of Illinois Press, Urbana, 1975

資料

1. あなたはこの話し方を聞いてどのような印象を受けましたか。
該当する箇所に○を付けてください。

	たいへん	どちらかといえは	どちらかといえない	どちらかといえは	たいへん
聞き取りやすい	-----				聞き取りにくい
待てる	-----				待てない
スッキリする	-----				イライラする
笑える	-----				笑えない
明るい	-----				暗い
爽快	-----				不快
力強い	-----				弱々しい
親しみやすい	-----				親しみにくい
自然	-----				不自然
気持ちが良い	-----				モヤモヤする
かわいそう	-----				羨ましい
内容が分かりやすい	-----				内容が分かりにくい
楽しそう	-----				苦しそう
速い	-----				遅い
長い	-----				短い

〈主査講評〉

私たちは、話の内容に耳を傾けると同時に、話し方や表情などにも意識を向け、話し手の人柄などを推察する。吃音者は、何気ない日常会話でさえ最初のことばがつかえて出てこずに苦しい表情をすることがある。それにより誤った人格理解をされてしまい苦しむことが少なくない。

医療従事者は患者を正しく理解することに努めなければならない職種であるが、果たして本当に患者の人格まで正しく理解できているのだろうか。そんな怒りにも似た筆者の疑問がこの研究の発動源となった。

調査の結果から、本来、吃音者の一番の理解者であるべき言語聴覚士を目指す学生は、必ずしも吃音者を受容しようとする意識が高いわけではなかった。これは予測を裏切る結果であった。それだけでなく、科目担当教員の力量不足をも突き付ける結果であった。知識・技術を伝えるだけの授業ではなく、患者の人権を尊重した教育・啓発に努めていかなければならない！と猛省させられた指導教員だった。